

知事をはじめ各審査員等からのコメント

1. 大野 元裕 実行委員会会長（埼玉県知事）

世界初のデジタルシネマ映画祭として始まった「SKIP シティ国際Dシネマ映画祭」が記念すべき20周年を迎えました。昨年に引き続きスクリーン上映とオンライン配信を行うハイブリッド方式で開催します。全国の皆様にこの映画祭を存分に楽しんでいただきたいと思います。コンペティションには102の国と地域から1,246作品の応募をいただきました。これは、コロナ禍で十分に創作活動ができなかった中でも若手クリエイターの情熱が失われていなかったことと、手塩にかけて作り上げた作品を初めて披露する舞台として本映画祭に大きな期待が寄せられていることの証だと考えています。映画祭のオープニングを飾るのは、映画祭20周年と川口市制施行90周年を記念して川口市と埼玉県が共同製作した『瞼の転校生』という作品です。監督の藤田直哉さんは2020年に短編部門優秀作品賞を受賞されています。このほか過去のノミネート監督の最新作を上映し、それぞれの監督から本映画祭への思いや参加後の歩みなどを語っていただく特集なども企画しています。本映画祭20周年をぜひ盛り上げていただければ幸いです。

2. 奥ノ木 信夫 実行委員会副会長（川口市長）

埼玉県知事も私も川口の出身で、本映画祭を開催させていただくこと、そして今年で開催20周年という節目を迎えますことを心から感謝申し上げます。川口市制施行90周年という本市にとっても記念の年であり、埼玉県と共同でオープニング作品を製作させていただきました。川口市立高等学校をはじめとする市内各所で撮影されているほか、川口市立高等学校附属中学校の生徒や市民によるエキストラもご協力いただきました。私が会長を務める「SKIP シティ国際Dシネマ映画祭を応援する市民の会」においても皆さんにご協力いただき、市をあげて映画祭を応援しています。開催期間中はJR川口駅西口からSKIPシティへの無料バスも運行するので、ぜひ大きなスクリーンでお楽しみください。

3. 八木 信忠 総合プロデューサー（埼玉県産業労働部顧問）

今年で20回目となりますが、映画祭の創設当時を思い返すと随分と苦勞をしたことを思い出します。映写機が今ほど良いものではなく、4Kというものもない時代で、デジタルシネマというものが少しずつ姿を現してきた頃です。国際規格に適う鮮明さで上映できるのかどうか、不安も多かったものです。映画といえばまだ「フィルム」の時代に、あえてデジタルシネマのための映画祭を志向し、そのネーミングに「Dシネマ」と明示いたしました。それでも、当時は応募作品のフィルムが送られてきて返送に手間取るようなこともありました。それが今やデジタルは当たり前の中になり、時の流れは速いと実感しております。今年の応募作品も良質な作品が集まっていますので、是非御覧いただければと思います。

4. 豊島 雅郎 国際コンペティション審査委員長（映画プロデューサー）

私はアスミック・エースという会社に所属しており、2018年に上田慎一郎監督の『カメラを止めるな!』、2019年に中野量太監督の『長いお別れ』、2022年に片山慎三監督の『さがす』などの制作・配給で携わり、そんなことからSKIPシティ国際Dシネマ映画祭出身監督に縁が深く審査委員長を拝命いたしました。

この映画祭は、普段では公開されないような作品や、さまざまな国の監督たちが集まり、皆で作品を鑑賞する非常にアットホームな雰囲気印象です。20年という積み重ねられた歴史と世界に先駆けてデジタルシネマを打ち出したという、そのご尽力に頭が下がる思いです。昨日の日本記者クラブでの会見で田中泯さんは「作り手が消費者におもねるだけでなく、芸術・文化としての質を向上するものを作っていかなければ駄目じゃないか」というような刺激的な発言をされましたが、私もその発言に感銘を受け、その通りだと思いました。本映画祭もそういった志を持った、世界に誇れる、世界に発信できる質の高い映画祭だと思います。

5. 中野 量太 国内コンペティション審査委員長（映画監督）

2012年に『チチを撮りに』で本映画祭の監督賞をいただき、そこから全てが繋がって現在の位置を切り開いていただいたと思っています。「これでダメだったらもう止めよう」、それくらいの想いで40歳手前くらいになって応募したのが本映画祭でした。藁をも掴むような思いで、どうか見つけてくれと、そんな気持ちを今でも鮮明に覚えています。だから応募される方々の気持ちが痛いほど分かります。と同時に、プロの壁を超えるために何が足りないのか、ということも分かります。その才能を伸ばすための映画祭の一番の役割は褒めることだと思います。僕の自主映画も褒めてもらって何とか頑張れた気がします。僕にしかできないアドバイスが出来ればいいなと思っています。新しい才能に出逢うことを楽しみにしています。

6. 土川 勉 映画祭ディレクター

今年の映画祭の特色は、過去本映画祭にノミネートした監督たちが再度、応募してくれたことがあげられます。海外からも2018年に『ザ・ラスト・スーツ』で観客賞を受賞したアルゼンチンのパブロ・ソラルス監督の作品が再度ノミネートされました。国内作品も日本初上映というハードルがあるにもかかわらず、ご応募いただき多数ノミネートされました。今年も充実したラインアップを揃えました。ぜひ川口市のSKIPシティにお越しいただきまして楽しんでください。もしお越しになれない場合でも、オンラインでぜひご覧ください。

7. 藤田 直哉 オープニング作品『暎の転校生』監督

私は2020年に『stay』という短編作品で優秀作品賞をいただき、この映画祭に育てられたと言っても過言ではありません。今回、戻って来て大変光栄です。この作品は大衆演劇の劇団に所属する裕貴が公演に合わせて一か月ごとに引っ越しをし、転校してしまう話で、川口市の実際の中学生にエキストラで参加していただいたりもしました。10代の子たちと一緒に映画を作るのが初めてだったので、とても楽しかったです。是非、劇場で観ていただきたいです。『stay』の頃は(コロナの影響で)本映画祭はオンライン開催のみでしたが、今回は初めてのフィジカル上映。直接コミュニケーションが取れたりすることを、大変楽しみにしています。

